

7 吉益家門人録の考察

町 泉寿郎

一、はじめに

演者はこのたび、古方医学の名家・吉益家の門人録を、東京大学医学図書館呉秀三文庫に見出した(本誌二八巻四号の岡田靖雄編の同文庫目録に著録。以下、呉本と略称)。従来、吉益家門人録は矢数道明所蔵の二本、いわゆる奥田本と深川本が活字翻刻されてよく知られている(『漢方の臨床』三五巻八・九・一〇・一一号、三六巻四号)。呉本は呉秀三が『東洞全集』(吐鳳堂刊・一九一八、思文閣出版復刊・一九七〇)に、東洞門五四六人、南涯門一四二二人、北洲門六七五人と記した際に拠りどころとした資料であり、出現が待望されていた本である。今回は呉本を中心に、奥田本・深川本と比較対象しつつ考察した結果を発表する。

二、収録人数と資料価値

三本の収録人数を精査したところ、呉・矢数の報告は補訂を要し、正確には次の結果をうる事がわかった。

〔呉本〕東洞門五四三人、南涯門一三六九人、北洲門六七六人、復軒門三五九人、計二九四七人。

〔奥田本〕東洞門五二七人、南涯門三五四人(東日本のみ)、北洲門一二六人(東日本のみ)、復軒門欠、計一〇〇六人。

〔深川本〕東洞門欠、南涯門八七六人(文化三年まで)、北洲門六七〇人、復軒門三五八人、計一九〇四人。

三本の重複を除いた合計は、東洞門五四四人、南涯門一三七五人、北洲門六七七人、復軒門三六一人、計二九五七人となる。呉本は各代の収録数が最多で、奥田本・深川本が呉本に加えられる人数は少ないことがわかった。

一人あたりの情報の量と正確さにおいても、呉本が奥田本・深川本に優ることが確認できた。

三、南涯門における呉本と深川本の人数差

呉本と深川本の南涯門の人数差を、矢数は深川本が欠く文化四年以後の入門者数と推定している。しかしなが

ら呉本は深川本に比べて文化三年以前でも一五八人多い。この一五八人は寛政四年から享和二年にかけて集中している。この時期は南涯が罹災して大坂移住の後、再び帰京した年を起点とする期間で、京都と大坂に南涯塾が併存した時期とみられる。呉本のみ所載者は、当該時期の大坂塾入門者と推定される。

四、奥田本東洞門の私補門人

奥田本東洞門に「私補」と記された五人（北條玄益、中神琴溪、瀧鶴台、新崎国林、村井椿寿）はいずれも呉本未収。一方、奥田本東洞門の伊沢則素は、呉本によれば新崎国林の前名であり、奥田本の「私補」者はこの事実を知らなかったと見える。「私補」は奥田鳳作の天保十四年時の私見による増補にすぎず、吉益家の原門人録および原門人録から再編された地域別門人録にはこの五人の名はなかった。つまり正式の東洞門人ではないものと考えられる。

五、各年毎の入門者数の推移

南涯時代の寛政後半から文化中にかけて入門者数のピークを迎える。最多年は文化三年の八八人。この前後の

寛政五年から文化九年までの二〇年間に、全門人数の三八・七％に上る一一四六人が入門している。各代の年平均入門者数は、東洞時代一八・七二人、南涯時代三四・二五人、北洲時代二一・八四人、復軒時代一三・三七人であった。

六、入門者の地域別構成

近畿二八・三〇％、中国二一・二五％、四国一〇％内外、九州一〇％内外、関東五％内外、中部一五％内外、東北一〇％弱の構成が維持される。近畿・中国出身者が約半数を占めたことがわかる。入門者数の上位五国を挙げれば山城（二〇〇人）、播磨（二三三人）、備前（二二四人）、摂津（二〇六人）、紀伊（二〇三人）。下位五国は伊賀・志摩（各三人）、飛騨（二人）、安房・佐渡（各一人）。

（北里研究所・東洋医学総合研究所医史学研究室）